

はしだのりひろ



おメさんゴハン

まだ



はしだのりひこ(端田宣彦)

1945年1月、京都に生まれる。

1964年、同志社大学入学。在学中、フォークコンサートの企画・制作を数多く手がけ、フォークブームの火つけ役となる。

1967年、ザ・フォーク・クルセダーズに参加、「帰って来たヨッパライ」が大ヒットする。

以後、「風」「さすらい人の子守唄」「花嫁」など多くのヒット曲を生み出し、音楽活動が続ける一方、司会やディスクジョッキーなど多方面で活躍。

1983年、妻の入院を契機に主夫生活に入る。

現在、二人の子どもの父親業に専念するかたわら、その体験を生かして「母と子のコンサート」に打ち込み、家族のあり方や教育の問題を考え続けている。

お父さんゴハンまーだ

1986年3月15日 第1刷発行©

定価 980円

1987年11月1日 第11刷発行

著者 はしだのりひこ

発行者 橋田 常俊

発行所 (株)教育史料出版会

〒101 東京都千代田区三崎町1-2-2

電話 03-291-3571

振替 東京2-79022

印刷/平河工業・埼玉福祉会 製本/三森製本

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-87652-015-1 C0095 ¥980E

教育史料出版会

お父さん
ゴハンまだ

はしだのりひこ

お父さんゴハンまだ★もくじ



へ二章へ帰ってきたお父さん

父、ニッポンにおりる 10

エッー 妻が入院 13

悪いのはワシやないぞー 15

点滴と酸素吸入 18

頭のなかはテンヤワンヤの博覧会 20

先生、ホントに狭心症ですか？ 23

冬のザルそば 26

心配するな、お父さんがついでる 28

塩鮭力りカリ、みそ汁ダシぬき 31

この病気にはストレスがいちばん悪いのんえ

子どもたちだつて…… 37

玉ねぎとニラメツコ 39

仕事つて家事よりラクだ 42

新菜、篤人の母恋病 43

ボクは、子育てをなんにも知らなかった 45

はしだのりひこ小史 47

ボクと妻の出会い 49

へ二章へワシは主夫じゃー！

時は春、心は木枯し 54

口ツキード病院事件 57

文句を言わず、黙つてオレについてこい 59

洗濯機が動かない 63

入学式——主夫の涙 67

第三章 風の中の街にヨメ

近所づきあいもラクじゃない 69

維新憲章公布 71

もうボンカレーは使わない 73

子どもたちへの連絡ノート 75

お父さんは娘に弱い 79

主夫が主婦を斬る 82

男の勇気とは 85

ボクは退院を喜びません 88

東京で使う京都弁の余波 90

イジメとの遭遇 93

新菜の「イタイ、イタイ病」 98

心配の正体 101

はしだくんがケガをしまして…… 104

妻、学校二怒ル 108

イジメとフザケは違います 111

篤人が泣く、ボクも泣く 114

父親同好会 118

本当の強さとは、やさしさ 122

ステージで燃えないボク 125

妻、救急車で五回目の入院 128

雪の日の決意 129

仕事、やーめた 132

飽食時代の引越とは 133

〈四章〉主夫前史

オレはまだ親じゃない
 はつび、ばあすでい、アットちゃん¹³⁸
 体のなかからチチオヤが湧いてきた
 アドベンチャー登山¹⁴⁷
 プロレスごっこか、イジメか¹⁵²
 ボクが教えなければならぬこと¹⁵⁵
 ミカンとかやくごはん¹⁵⁹
 一枚の悲しい絵¹⁶²
 先生、そんなにいそがせないで¹⁶⁸
 減点主義よサヨウナラ¹⁷¹

〈五章〉おまえの夢、ボクの夢

ああ、カルチャーシヨツク
 古き亡霊にや負けられない
 青はススメではありません^{180 178 176}
 やさしさの意味¹⁸²
 二つの個性を育てる
 子育ては「質より量」^{187 184}
 過干渉の母親たちへ一言¹⁸⁹
 めんどろなことをじつくりやる——それがボクのやり方
 “らしき言葉”なんかくたばつちまえ^{195 193}
 おんなつ！ パンツ！ おしりつ！
 妻よ、はばだけ¹⁹⁷

おやすみ、子どもたち

201

お父さんたちよ、家へ帰ろう！

——あとかきにかえて

207

題字 端田 新葉
装幀・イラスト 片岡 悦子

第二章 帰ってきたお父さん



父ニツポンにまゐる

一九八三年一月十一日、この日のボクは、朝から超ご機嫌だった。

長い旅のさなか、かたときも思わない日がなかった最愛の家族のもとへ帰れるんだ。

妻・和子、小学校四年の長男・篤人、^{あつひと}五歳の長女・新菜の顔が目に浮かぶ。インド旅行から一カ月ぶりの帰国の日であった。

ボクを家族のもとへとはこぶ翼は「天空の覇者」エジプト航空機だ。インドへ行くのに、なぜエジプトが出てくる、などと疑ってはならない。わがエジプト航空は、インド・ネパールはもとより、アジア・アフリカ諸国をほつき歩く常連客にとって、その安いチケットゆえにダントツ人気なのだ。

そもそも、飛行機というものは疑いをもって乗るものではない。

「あんなデッカイものが空を飛ぶこと自体おかしいんだ」なんて否定的理論をふりかざしたのは、たしか武田鉄矢だったと思うけど、もしまちがっていたら悪いから南こうせつ、かも……。たしか若いころの北山修も、そんなことを言ってたっけ。

「滑走路が凍っちゃって着陸できないときは、どうすればいいでしょう」なんて、ひとを

ひどく不安にさせるようなナゾナゾを出しておいて、「ハイ、答えは滑走路にチェインをまくのです」なんてバカな解答を教えてくださいましたのは、これはまちがいなく、健康だった。

ボクの場合は、日ごろから「飛行機なんでものは羽根さえついてりゃ飛ぶもんだ」と、かたく自分に言いきかせてから乗ることにしている。

それでもしなけりゃ、耐用年数をとくにこしたようなエジプト航空機に、おとなしく乗っていられるもんじゃない。床のカーペットの汚れ具合といい、壁布の引っぱがれ具合といい、さらには天井から正体不明の水がポタリ、ポタリと落ちてくることといい、使いつて時代にあつて万骨枯れはてるまで飛びつづけようとする健気なエジプト機に、なにやらわびしい親近感すら抱いてしまうボクである。

成田着陸は午前五時四十分。古代の夢とロマン・南国の香りといくたの奇跡に別れを告げて、空の旅は終わった。ああ、まさに旧約聖書「出エジプト機」ではあった。

タラップを降りると、そこは厳冬の日本。まだ正月気分もぬけない十一日の夜明けが待っていた。

さっそく、わが家に帰国第一報を入れる。

「もしもし」とボク。

「モシモシ」と答えるのは、わが家の一番鶏・篤人である。まだ声変わりの時期でもないのに、きわめつけに低い声が聞こえてくる。

「おーっ、あつひとケ」

「うん」

「ただいま」

「あー、おかえりなさい。いま、どこ？」

「成田や」

「ふうーん」

「なん時ごろ起きた？」

「うーんと……、五時五十分」

「あっ、そう。これからジョギングか？」

「……そう」

「あー、お父さんな、九時半ころには家に帰るし……」

「ふうーん」

「ほんなら切るぞ」

「はい」

本来、久しぶりの親子の会話が展開されるはずなのに、現実はいくのごとし。しかし、無口といえども久しぶりに聞いた息子の声に、ボクのご機嫌はたかまった。いまの電話では聞きそびれたが、いつもどおりに、妻と娘はまだ夢のなかだろうとも思う。

めざすわが家にあと一歩だ。帰ったら、ゆっくり旅の疲れをいやして、お土産を開いて、しゃべって、笑って、それからインドでみた夢の続きをみよう。

三つに振りわけた三十キロ近い荷物の重さも、まるきり気にならない。ボクは足ばやに家路をたどった。



エッ！

妻が入院！

“う、う……うつ”

“う、ぐ、ぐ、ぐ……”

“ああーっ！”

“痛ったたあつ”

……そのときの驚きを、どうあらわせばいいだろう。後頭部をいきなりブン殴られたよ

うな衝撃だった。東京・上野駅のホームに呆然と立ちつくすボクの全身から、スーッと血の気がひいていくのがわかった。

「和子さんが入院——」

事務所のマネージャー宅に帰国報告の電話をかけたなら、第一声がこれだったのだ。『妻が入院……』なんと忌まわしい聞くに耐えない言葉だろうか。

「えー、それで、いま、お宅は社長が泊りこんで……」

ボクの上機嫌も完膚なきまでに打ちくだかれた。すぐに自宅のダイヤルをまわす。弟が出た。彼が、ボクの事務所の社長なのだ。

よほど熟睡中だったとみえて、いつものつつけんどんな調子が、さらにパワーアップした感じだ。

「ああ……、心臓発作らしい……」と弟。

「まさか、まさか」をぼくは心のなかで絶叫、連呼だ。

「入院しやはったから、もう大丈夫やろ」

弟の言葉は善意から発している。そうとわかっているのだが、ボクはムカッ腹がたった。その場かぎりの気休めがなんになるんだ。なにがどう大丈夫なんだ。

「そいじゃなにか、おまえは……」と毒気づくボクの声は、すべりこんできた電車の轟音

にのみこまれた。議論している場合か、くだらん。ボクは荷物をかき集めて電車に飛びのった。

一瞬にして躁^{さく}から鬱^{うつ}に転じたボクは、車内の喧騒さえわずらわしい。

“なんだって学生どもは、朝っぱらからキャーキャー騒ぎやがる！ おまけに向かいに座ったオヤジは、なんで陽除けを下ろさない！ こっちは、ゆうべ一睡もしてないんだ。ええい、まぶしいじゃねえか！”

いらだちついでに、ふっと息子の言葉を思い出す。……待てよ、彼はさっきの電話で、なんで入院のことを話さなかったんだろう。不測の事態に動転していたのか、ボクの電話が思いがけなかったのか、寝起きでボーッとしていたのか、それとも、いつもの無口のせい……。あれこれと考えているつもりではあるが、まったくまとまりがつかない。

入院・心臓病——二大ショックのまえでは、インドもはるか遠くへふっとんでいた。

 悪いのはシンやないぞ！

ようやくの思いで世田谷区上馬のわが家へたどり着く。去年の夏、京都からよび寄せた家族と水入らずの生活をはじめて五カ月目である。